

## 説教「喜んで仕えよう」

### 詩編 113 編

マルコによる福音書 10 章 42～45 節、ヨハネによる福音書 15 章 9～17 節

2008.1.6

新年礼拝

日本バプテスト同盟 横浜南キリスト教会

私たちの主イエス・キリストの父なる神、天地万物の創造主なる神をほめたたえ、愛する南キリスト教会の皆様方の新しい年の歩みが祝福されますようお祈りいたします。ご出席の皆さん、新年おめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、御言葉<sup>みことば</sup>を語らせていただきますが、年の初めにあたって、まず創世記 1 章 1 節「初めに、神は天地を創造された」から、私もこの御言葉から始めたいと思います。元旦の朝は晴れ、朝日を受けて散歩をしますと、格別にすがすがしい気分になりました。神様が天と地とその中のすべてのものを造ってくださった。いや、この私という人間もこの世に与えてくださる！ この創造主なる神を信じて仰ぐ者とされていることはなんと幸いなことか、と思いました。

この造り主なる神は、この 1 章によれば、六日の間に存在するすべてのものを造られ、31 節を見ますと、「神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった」とあります。ある注解書によると、これは神様御自身がお造りになったそのすべての造られたものを見て「これはとても素晴らしい」とほめたたえておられるのだ、と説明していました。これを読んで、教えられました。造られたすべてはそんなにも良いもので、素敵な存在なのだ。その中でも私たち人間は、そのすべての造られたものの中で神の最高の作品なのであります。そのように造られた私たち人間はなんとという光栄なことでありましょうか。

年頭にあたってまず、私たちは神によって造られたこのとても素晴らしい人間なんだということを認識しなければなりません。しかし、それと同時に、この時代に生きる世界中の人間が抱えている世界の様々な困難な問題を神様はどのように見ておられるのだろうか、と考えざるもえません。

そこで、先に読んでいただいた詩編 113 編を見ていただきたいのです。ここで詩人は、神をほめたたえよ、と呼びかけています（1 節）。今申しましたように、私たちを素晴らしい存在として造っ

てくださった神様は、すべての人々がほめたたえずにおられない万物の創造主であります。

さらに 2 節を見ますと、その神は、今から永遠に至るまでほめたたえてもほめたたえてもなお足りないほどにいつまでもたたえられるべきお方である、と言います。そして続く 3 節で、世界宇宙の隅々に至るまですべての領域において、つまりどこに住む者であろうと、すべての者がこぞって主の御名をほめたたえるように、と呼びかけるのであります。

では、この創造主なる神がなぜ、それほどまでほめたたえられるべきなのか。その理由は何よりも、「主はすべての国を超えて高くいまし、その主の栄光・輝きは天を超えて輝く」とあるとおりです。つまり、天が一番高いところかと思ったら、神はその天をも超えて高いところにあつて、世界を支配しておられる。それゆえ、この私たちの神に並んで存在するような偉大な者がこの神のほかにいるだろうか。いや、この創造主なる神様に並び立つような者はいない。それほど、神は唯一最高の神であられる、と宣言しているのであります。

ところが、この詩人によれば、そのような高いところにいます神はそれでは地上の低いところにごめいている人間の問題などには何の関わりもお持ちにならないのだろうかという、決してそうではない、と次のように語ります。5 節 b から 6 節です。最高に高いところに君臨される神にもかかわらず、なお、とても低いところに下って来られる！そして、天と地の出来事をすべて見てくださる神である、と証ししています。栄光に輝く最高の神であられるにもかかわらず、人間社会の最低のところでも苦しむ者たちを見てくださる。これこそ、最も驚くべき、人間の思いを超えた全知全能なる神であります。

次に、7 節以下において、高くいます神が低いところにまで下って来てなさる業を語ります。

7 節では、弱い者を塵ちりの中から起こし、乏しい者を芥あくたの中から高く上げて、身分の高い地位ある者と並んで座らせてくださる、と言われていています。イスラエルの歴史の中で例を挙げてみますと、イスラエルがいまだカナンカナンの地に定住して間もない不安定な時代がありました。作物を作りそれを収穫する頃になると、周りの遊牧民がやって来て収穫したものを奪い取るといった時代に、ギデオンという人がいました。彼は収穫時、人の目につかないぶどう畑ぶどう畑に設けたぶどうの実を踏むための酒ぶねの中に隠れて、穀物の脱穀をしていました。そんなギデオンに主は霊を豊かに注いで力を与え、略奪にやって来る周りの部族を撃退して、その地域を治めさせたのです。(士師記 6～8 章) まさしく、塵芥の中から主は彼を高く引き上げ、民を自由にされたのであります。

さらに 9 節を見ますと、不運な女の人の悲しみを顧みてくださるといいます。「子のない女を家に返し」とあります。つまり、結婚しても子どもを産めないでいる妻は家から出されてしまう。「嫁して 3 年、子無きは去る」という言葉のとおりです。

これは、サムエル記上 1 章にある、サムエルの母ハンナの物語を思い起こさせます。ハンナは子どもがないので、彼女のライバルの、もう一人の妻に馬鹿にされていました。毎年、一家揃ってシロの神殿に詣で、そこで収穫物や家畜を犠牲として献<sup>ささ</sup>げお祝いするのですが、ハンナは独り悲しみに暮れ、神殿の前に座して、泣きながら「男の子をお授けくださるなら、その子を神に仕える人として神様にささげます」（サムエル上 1：11）と誓い、涙ながらに祈り続けました。そこで、その様子を見ていた神殿の祭司だったエリという人が「これこれ、いつまで酒に酔っているのか」ととがめると、ハンナは「いいえ、私はそんな女ではありません」と言って、訳を話したのです。すると、事情を聞いた祭司エリは「神様があなたの願いをかなえてくださるように」と言ってくれた。元気になったハンナは家に帰り、間もなく子どもを宿します。こうして生まれたのが、後の有名な神の預言者サムエルでした。9 節に「子のない女を家に返し、子を持つ母の喜びを与えてくださる」とあるのは、まさしくハンナのことであったと言ってよいのであります。

このように、いと高きところで全世界を支配なさる神は、同時になお低く下って、弱い者、悲しむ者を顧み、その祈りを聞いてくださる神であることが明らかです。

しかし、この神はさらに驚くべきかたちで低く下って来られました。クリスマスで十分味わいましたように、マリアは聖霊によって神の子イエスを産むと告げられたとき、神をほめたたたえた賛歌の中で「身分の低い、この主のはしためにも目を留<sup>と</sup>めてくださった」（ルカ 1：48）と歌っています。まことに高きにいます神が弱い肉体を持った人の子の姿をもって私たちのただ中に生まれ、弱い者、貧しい者、苦しむ者、人から見捨てられた者たちのもとに来られて、彼らを癒やし、力と希望を与えてくださいました。

そして様々な大切な教えを説かれましたが、今朝 私が最も注目したい教えは先ほど読んでいただいたマルコ 10 章の終わりのところで、イエス様が弟子たちを戒めた言葉です。それは、弟子たちの間で誰が一番偉いか問題になったためであることが記されています。弟子たちの中で、ゼバダイの子ヤコブとヨハネが「イエス様が王座にお就きになったら、イエス様の右と左にそれぞれを座らせてください」と願い出たのです。それを聞いた他の弟子たちはこの兄弟の勝手な願いに腹を立てた、とあります。イエス様は 42～44 節においてそんな弟子たちを戒め、「あなたがたは異邦人の世界のように人の上に立ち、権力を握り、偉くなろうとするが、あなたがた弟子たちの間ではそうであってはならない。偉くなりたい者は皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者はすべての人の僕<sup>しもべ</sup>となりなさい」と言われました。いと高き神が低く下って、イエス様となって来られた。そのお方の最も大事な戒めがこれでありました。イエス様はこの生き方を弟子たちの手本とするようにと語り、実行されたのであります。

続く 45 節には、「人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金<sup>みのしろぎん</sup>とし

て自分の命を<sup>ささ</sup>げ<sup>る</sup>ために来た」とあります。私たちはどんなに努力しても罪の力に<sup>まと</sup>い<sup>っ</sup>付かれ、自分の力ではこの罪から自由になれずに、神様の前にそのまま受け入れられ、救われることができません。そこで、神の子イエス様が命を投げ出し、罪のないイエス様が私たち罪深い者のために代わって身代金として、罪の<sup>あがな</sup>い<sup>きん</sup>として十字架上で血を流されました。それは、私たち・イエス様を信じる者たちを、罪のない者として神様に受け入れられる者とするためでした。このように、神の子イエス様は高い神の座から降りて来てくださり、私たちに「互いに仕える者となるように」と教えるために、御自分の命を投げ出されたのであります。

他者のために仕えるということは、イエス様を信じた私たち教会の者たちの中にとどまらず、私たちが生きている社会の中で仕えるということでもあります。そのような心構えを持って生きることが、社会の、ひいては世界の平和と救いに貢献することになります。

受難節に入りますと、この教会ではイエス様が弟子たちの足を洗うという洗足の儀式を覚えて祈祷会を持ってありますが、それはヨハネ福音書の 13 章に記されています。イエス様が<sup>すぎこしさい</sup>過越祭の前に弟子たちと食事をされた、その席でのことです。イエス様は腰に<sup>てぬぐ</sup>手拭いをつけ、たらいに水を<sup>く</sup>汲んで弟子たち一人ひとりの足を洗われました。そして、その足を<sup>ぬぐ</sup>拭い終わってから言われた。「先生であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合いなさい」と。つまり、互いに仕え合いなさい、と教えられたのであります。

最後に、他者に仕えるということは決して、楽なことでも容易なことでもありません。人は誰でも、楽をし、人の上に立って命令する立場に立とうとします。イエス様が語っておられるとおりです。イエス様は、にもかかわらず、ついには命さえも投げ出してくださいました。それは、今度は、救いにあずかった私たちが他者に仕える者となり、家庭にあつて、教会にあつて生きるためであります。

そこで、私は言いたいのです。イエス様に愛され仕えていただいたこの私たちは、喜んで仕える者になりましょう。いやいや（嫌々）しかたなしに仕えるのではなく、あるいはしぶしぶ（渋々）そうするのではなく、喜んで仕える者になりたいものです。

新しい年を迎えました。この一年の歩み、イエス様の教えに従って、喜んで仕えてまいりましょう。互いに仕え合いましょう。そこに、神様の喜びと祝福とがあります。